

渡辺克巳 写真展Ⅱ

「1982 印度」直土ヒタツチ胎内

2011/09/23 - 10/30 11:30～18:30(月休・祭日の場合翌日休)

10月15日(土)はトークイベントのため、ギャラリーは17:45に閉廊させていただきます。

[「art-Link 上野-谷中 2011」](#) / 芸工展 2011 《参加企画展》

直皮膚(はだ)に吸い込まれる 大気
滔々と沁み染まる 命の泥土
足裏から脳天へ迷る 聖なる濁水

「タイムトンネルくぐって本当に中世に出たみたい。カルカッタから離れるにしたがって段々中世的なものがそのまま出てくるんですよ」(渡辺)

中世の世界がそのまま眼前に混在するインドの日常を、流しの写真屋渡辺克巳が新宿と同じ目線で捉えた、ストレートで極めてオーソドックスなモノクロ写真に写りこんだものは・

「空気は空気としてちゃんとあるのか 太陽は太陽としてちゃんとあるのか 木は木としてちゃんとあるのか」(渡辺)



print : [渡辺克巳「1982 印度」](#)

1960年代～70年中頃まで流しの写真屋として、新宿のトルコ嬢・ヌードスタジオ嬢・オカマ・ヤクザ・ホステス・浮浪者を、路上のゴミがあろうと傾きかけた看板があろうと、場末の背景はそのままに撮っていた渡辺克巳は、お客さんに「何だおまえ、こんなきつない所をバックにして撮って」と云われても、「いやいや、これは絶対いい。後でいい思い出になりますよ」「あんたは<ここ>に立ってたんですよ」と云って撮っていました。

インドでも新宿と同じように「あんたはここに立ってたんですよ」と云いながら撮っていたかのような、今回の初公開となるオリジナルプリント80点(予定)は、路上に捨てられた残飯や泥水上での寝食、草を食む聖牛、物乞いをする賤民、悠として立つ大木などが混在する、その混在そのものをインドの日常として切りとった、ストレートで極めてオーソドックスなモノクロ写真となっており、渡辺克巳が混然としたままの<ここ>を印画紙に封じ込めば封じ込めるほど、はかり知れない大きなインドに呑み込まれたような、圧倒的な実在感をもってこちら側へ迫ってきます。



「ベナレスで見ていると上の方で洗濯しているのね、その水が流れてくるじゃない、それに浄水槽から泥水みたいなのがドロドロと出て来る、その下の方で御神水として飲んでいるわけ。分かんないねあれは。病気の人も一緒に入るんだよね。上から死体が流れてきたりね、死んだ人も河っ淵で茶毘にふすわけですね、だからあそこにいて見あきないね。全部あるわけですよ。

輪廻なんていっているのがさ、目の前で全部見えちゃうわけですよ。

インドへ行くと神様が、それはいわゆる偶像とかなんかじゃなくて、まず空気は空気としてちゃんとあるのか、太陽は太陽としてちゃんとあるのか、木は木としてちゃんとあるのか、それがちゃんと見える。それはやはり神々という感じがするのね。日差しがもの凄く強いと、でっかい木があって日陰をちゃんと作ってくれる。

すると、その日陰そのものが神様みたいに見えてくる。

暑い時に日陰に入ると涼しい風がスツときて、そこで賤民みたいな人たちが涼んでいるとね、人知じゃなくて、大きな何かに助けられて生きているみたいなのがあって、そういうのが神様じゃないかと思う実感があるのね。



日本で泣くような事があってもインドを見てしまえば、なんだ泣く事ないじゃないかという気がするわけですよ。それはなんていうんだろうね。幅が広いんですね。新宿しか知らなければ、大変な所だなと思って見ていたんですが、

インドへ行ったら百倍の人間の幅がある。

それが自然の一つとして調和して生きているんですね」

「新宿、インド、新宿」ポット出版より（初出 1985「流行写真」三和出版）





トークイベントのご案内 ※ 終了しました

10月15日(土)、「渡辺克巳 1982 印度」のトークイベントが開催されます。

金子隆一氏(東京都写真美術館)×増田玲氏(東京国立近代美術館)というお二人のセッションは今回初めてとなります。

渡辺克巳は「流しの写真屋」として「新宿のワタナベ」のイメージが定着していますが、場をインドへと移してもその視線は新宿に在ったそれと、一切ぶれることはありませんでした。

生前の若い頃の渡辺克巳をよく知る金子氏と、渡辺克巳の写真に興味を持つ増田氏による対談は、新宿・インド、そして時をも越えて人々に切実な思いを伝える魅了してやまない「渡辺克巳の写真」に迫ります。

写真をやっている方、これからやろうと思っている方、もう既に充分に写真作家として成しえている方、たまには初心に戻りたい方、『銀塩』という言葉を知ると居てもたってもいられなくなる方、などなど年齢、性別、国籍全て問いません。

生前、渡辺克巳は「写真は手にとって見るのが一番いい」と語っていました。

今回、オリジナルプリント(インド/新宿 31.7×26cm)を会場で手にとって見ていただきながらのトークイベントとさせていただきます。

どうぞ、こぞってご参加下さい！(注:10月15日は17:45に閉廊いたします)

[日時・MAP・詳細](#)

※ トークイベント参加者のご感想です

http://twitter.com/#!/an_antblue

渡辺克巳トークイベント、興味深い話が沢山聞くことが出来て楽しかった。しかも、貴重なオリジナルプリントを何枚も手で持って見る事が出来た。なんと贅沢な。さらに、プライベートで鈴木理策さんが来てて驚いた。昨夜の谷中のお寺での出来事は、ギャラリーオーナーの熱い思いがあったからこそだ。

sekka

雨の中お越しいただいた方々、ありがとうございました。

ゲストの金子氏と増田氏にも感謝いたします。

また、会場を二つ返事でお貸しいただいた、本妙院のシャイなご住職にも感謝いたします。

根津に越す前の青山辺りでは、お寺さんを開放していただく事など想像もつきませんでした。

寺町谷中の夜の静寂は、都会の真ん中にいるとは思えないほどで、ああいう空間での座談会形式のトークセッションはちょっと心に沁みました。

故渡辺克巳さんと皆様、あらためて本当にありがとうございました。

九拝

金子隆一 東京都写真美術館専門調査員

増田 玲 東京国立近代美術館主任研究員

日時：10月15日(土) 18:30～

於：[本妙院](#) 台東区谷中4-2-1 1 ([sekka](#) より徒歩2分 日本美術院並び)

参加費：1,500円

人数：30名(事前予約制)

tel：03-5815-8280

email：info@sekka-jp.com

print：[渡辺克巳 1982 印度.pdf](#)

<掲載[『アサヒカメラ』](#)10月号「写真展ガイド」欄>

渡辺克巳 写真展Ⅱ「1982 印度」のトークイベントのゲスト、金子隆一氏(東京都写真美術館専門調査員)と増田玲氏(東京国立近代美術館主任研究員)の美術館での写真展のご紹介。

東京都写真美術館

畠山直哉展「Natural Stories ナチュラル・ストーリーズ」

10月1日(土)～12月4日(日)

東京国立近代美術館

レオ・ルビンファイン 「傷ついた街」

8月12日(金)～10月23日(日)

経歴

1941 岩手県盛岡市生まれ 1965 歌舞伎町で手札1組200円のポートレート写真の請負を稼業とする「流しの写真屋」を始める

1973 カメラ毎日アルバム賞を「新宿・歌舞伎町」で受賞/「新宿群盗伝 66/73」(薔薇画報社)

1974 「初観夜大伏魔殿」(荻窪シミズ画廊)

焼き芋屋で食い繋ぐ

1976 写真スタジオ経営 1980 「SHINJUKU'80」(新宿マーガレット)/「真夜中のストリートエンジェル」(銀座ニコンサロン)

1981 写真スタジオ閉店

新宿にて路上の人となる

1982 「新宿群盗伝」・「ディスコロジー」(晩声社)
1985 「渡辺克巳の新宿 20 年」(銀座ニコンサロン)
1993 「ごちゃまぜ天国」(コニカフォトギャラリー東京・大阪・名古屋)
1997 「新宿 1965-97」(新潮社)
2001 「Hot Dog」(ワイズ出版)
2006 1 月 29 日逝去
2006 「KATSUMI WATANABE」写真展「Gangs of Kabukicho」写真集(アート・リユー・ハウス・ギャラリー NY)
2008 「流しの写真屋 渡辺克巳」(ワタリウム美術館)
2011 「流しの写真屋 渡辺克巳展」 静かなる面魂(汐花 borderless space sekka)
「渡辺克巳 新宿、インド、新宿」(ポット出版)
サンフランシスコ MoMA 美術館収蔵



写真／流しの写真屋 渡辺克巳「ユリちゃん」

新宿に死んだ無頼のブリコロール

世の中には「ゴミ」と呼ばれる人たちがいる。ゴミはすでにその役目を終えたもの、いわゆる「用なし」だ。この一枚の白黒写真にある女は「ユリちゃん」と呼ばれ、新宿で働いていた娘だ。ユリちゃんは「ヒモ」と呼ばれる男に撲殺された。殴り殺したヒモもゴミのように殺されたユリちゃんも、表社会には用なしだ。その用なしな人たちを撮り続けた写真屋がいた。写真屋は裏の新宿を流しながら、路上に棄てられ靴底で踏みにじられた吸殻や、どこからともなく漏れ出てくるタンツバ小水混じりの汚水とともに「用なしな人々」を撮っていた。その路上に打ち棄てられた用なしなものたち、誰が吸ったか分らないタバコの吸殻や誰がたれ流したか分らない汚水は、写真屋の写真の中に、それぞれ絶妙な間合いをもち、用なしな人々を優しい陰影で包みこんでいる。

太古に湿地帯からウジのように湧いてきた異形なものたちは、21世紀の今もやはりウジはウジのまま。そのウジの屍が何層にも重なりひそむ裏を、アッケラカンとした表の人間が、笑いながら踏みにじりながら徒党を組んで闊歩している。裏も表もウジも湿地帯から湧きでたシダや爬虫類が遠い先祖だということを忘れたかのように。ウジが育ってハエとなり、そのハエが裏のゴミにも、表の笑い顔にも容赦なくたかってくる。しかし、お行儀の良いオモテにとっては、ウジもゴミも残飯も汚水も、所詮遺棄され排泄されたものからの用なしな派生ぶつ。

その遺棄されて用なしになったものたちを、一つ一つ丁寧に愛おしそうに掬い上げ、手のひらからこぼれ落ちないように白黒の写真にのせた写真屋。タンや吸殻やウジや小便は、太古の昔から用なしな人々のまわりにアメーバのように姿かたちを変えながら優しく包み込むことを知りえていたかのように。その姿は忌み嫌われる異形であればあるほど崇高な美をもった一枚の画となり、誰に見られることもなく静かに佇む。著名な人類学者が秘境の地でようやく見つけた我々のルーツのようなそれを、いともたやすく写真屋は新宿の上に露出させてしまった。しかし、写真屋の行動は確信犯だったのかそうではないのか、今は知るよしもない。

秋山祐徳太子氏来廊

秋山祐徳太子+しりあがり寿 『ブリキの方舟』

広島市現代美術館 2011/10/29 - 2012/01・09

先日、秋山祐徳太子さんが写真展「1982 印度」へ二枚のポスターを手にして、故渡辺克巳氏の激励に來られました。



一枚目がこれです

これこそ渡辺克巳が東中野の写真館で撮った、秋山氏の 1979 年都知事選の公式ポスターです。秋山さんの写真の横に、渡辺克巳とちゃんと明記してあります。

秋山さん曰く、「渡辺さん、いやナベちゃんには本当にお世話になった。こんな素晴らしい選挙ポスターの写真撮ってくれたんだ。これはアートだよ、しかもポスターってエーのがいいじゃない、ねエ」

「あいつは本当に人情家で全身で写真を撮るような、身体全体がシャッターだったんだよ。ケンカもよくしたがそれも全て写真だった、シャッターだったよ」 「あんなに情が深くて、命がけ

で写真撮ってたやつは他にはいねェ」「俺の出版記念会には必ず来てくれて、記念写真を撮って、こーんなにたくさんの写真をくれるんだ」

「インドの写真、ナベちゃんらしいなあー。渡辺来たぞー」と云って帰られました。

秋山祐徳太子先生、本当にありがとうございました。ライカ同盟総督にここまで言葉をかけられ、さぞや渡辺さんも喜んでいることでしょう。

周縁ばかりほじくり返している行き詰った現代アートや、理論優先の頭で見る写真の世界にうんざりしていたところだったので、人情家の写真屋がいてもいいんだ、全身でドカーンとシャッター押してもいいんだと、秋山さんのべらんめえ調（江戸つ子です）のほとぼしるお言葉をいただき、本当に溜飲が下がりました。

書籍「新宿、インド、新宿 渡辺克巳」(ポット出版)に、「男気のシャッター」というタイトルの寄稿文を書いていらっしゃいますが、渡辺克巳が男気の写真屋だったら、秋山祐徳太子氏も男気のある男です。

そして二枚目のポスターは、秋山祐徳太子+しりあがり寿 『ブリキの方舟』という広島市現代美術館で 10 月 29 日(土)から始まる展覧会のものでした。

詳細はこちらからどうぞ [『ブリキの方舟』](#)

どうぞ皆さま、広島へ足をお運び下さい。男気の秋山さんのたくさんの「ブリキの作品」が、しりあがりさんの作品と共に待っています。

宜しく願いいたします。

秋山祐徳太子、齢 76 才。めちゃくちゃ若いです。これからもズーンッと、いろんなところへ神出して、きらりと光る粋な男気と、その溢れ出るユーモア&反骨精神で常識をぶっ壊し、我々を楽しませてください